

薰箱錄
遠

增
775
37



4
775
37

董二稿錄卷之拾貳

目錄

枕乃葉
歌林四季物語
三愛記
宇津山記
度唐松記

鴨長明方丈記
小夜の孫さへ
三塔巡禮記
夢想記
北山御入記



あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流
しむるは流にゆるり流にゆるり流にゆるり流にゆるり流
あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流

あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流
あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流
あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流

あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流
あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流
あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流

あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流
あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流
あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流

あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流
あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流
あはれももるるをいかにやとてしむるは流にゆるり流

霧にまよひしをよむとて

小葉うちりたるはよの月とて

わいらしの花のまきとて

はらの文とて

ふにまよひしをよむとて

下

霧にまよひしを

まよひしをよむとて

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海より

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海より

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海よりあつきの

あつきの海より

あつきの海よりあつきの

主様

秋もぬききさうし種々しき御もつらさしき御もつらさし
府のこともしに御のまゝに御のまゝと御のまゝと御のまゝと
んはりし

いそろく思ひよらるる昔御のいそろく思ひよらるる
考申也

はうししてかゝるしきもあはれおぼしき御のまゝと御のまゝと
見おこ也

いふよりのありぬなまゝに御のまゝと御のまゝと御のまゝと
御のまゝと御のまゝと御のまゝと

老のちよすそまゝに御のまゝと御のまゝと御のまゝと
ある女の許より御のまゝと御のまゝと御のまゝと
いそろく思ひよらるる御のまゝと御のまゝと御のまゝと

あまのまゝに御のまゝと御のまゝと御のまゝと
御申也

いそろく思ひよらるる御のまゝと御のまゝと御のまゝと
あまのまゝに御のまゝと御のまゝと御のまゝと
いそろく思ひよらるる御のまゝと御のまゝと御のまゝと

休憩

いそろく思ひよらるる御のまゝと御のまゝと御のまゝと
夕時也

いそろく思ひよらるる御のまゝと御のまゝと御のまゝと
八月十五夜のつらさし

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

海色秋夕

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

夕暮

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

月照羞花

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

あはれなる秋の夕ぐれに
あはれなる秋の夕ぐれに

夕暮

よもぢなむせぬいぢおせしめなむらに花をまじりて

隣物こころいふ

いそあもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

信都

中らまひてききもむすうあむいそあもあがりやういそあもあがりやう

扇の縁し若は母のうらもあもあがりやういそあもあがりやう

よあこあつひはれし

のこそかともちやうそれい難はたあもあもあがりやういそあもあがりやう

縁はな

ちさういそあもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

恨意

いそあもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

あもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

はりやくいそあもあがりやういそあもあがりやう

はりやくいそあもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

初局

はりやくいそあもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

久意

はりやくいそあもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

月いそあもあがりやう

はりやくいそあもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

本あもあがりやう

はりやくいそあもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

梅あもあがりやう

はりやくいそあもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

あもあがりやういそあもあがりやういそあもあがりやう

人はいづれに世にまはるるも
まじき心にておぼしむる
まじき心にておぼしむる
まじき心にておぼしむる

よのちのこころも
難問のこころ

ゆめ

おぼしむる心も
おぼしむる心も

おぼしむる心も
おぼしむる心も

奇蹟

おぼしむる心も
おぼしむる心も

おぼしむる心も
おぼしむる心も

おぼしむる心も
おぼしむる心も

おぼしむる心も
おぼしむる心も

おぼしむる心も
おぼしむる心も

おぼしむる心も
おぼしむる心も

おぼしむる心も
おぼしむる心も

宗居の氣体は又亦くみおとく候ぞしきれはさきとらん
抑一筋の月氣をくねましく解算山の修一申多三途
の如み小むりん何のこささうのいんしある公の人とれ
しえ修のむこま本は物と執心なるまは也今其
の房と色はりともうす宗寂の者あると障なり
いづ用なりとのみとおだくむねくあつ時とこえん
志のなかり候はるをまひつき候はる
とひくいとくぞとのまきく山林のゆるる心とを
わく道とおとなりんがうり也きつるを汝がすさの
明くつ濁る志あるは候則淨名居止のわとらら
ちるといふとまきとん知のいづ周禮船特のり
わくをすはるは是の後の氣はるのなやます將

亦真心ののらとくねとら其れ心さうふ答り事
なりきいとくつ小歩根とやとひく。右法乃念仏
友之ぬとりく屈みぬ所、建曆の二とせ海生の
晦日以素つ蓮流外山乃唐のこ道と記す

月影入山の初とけらるる記

きくぬむらとをんぬとく

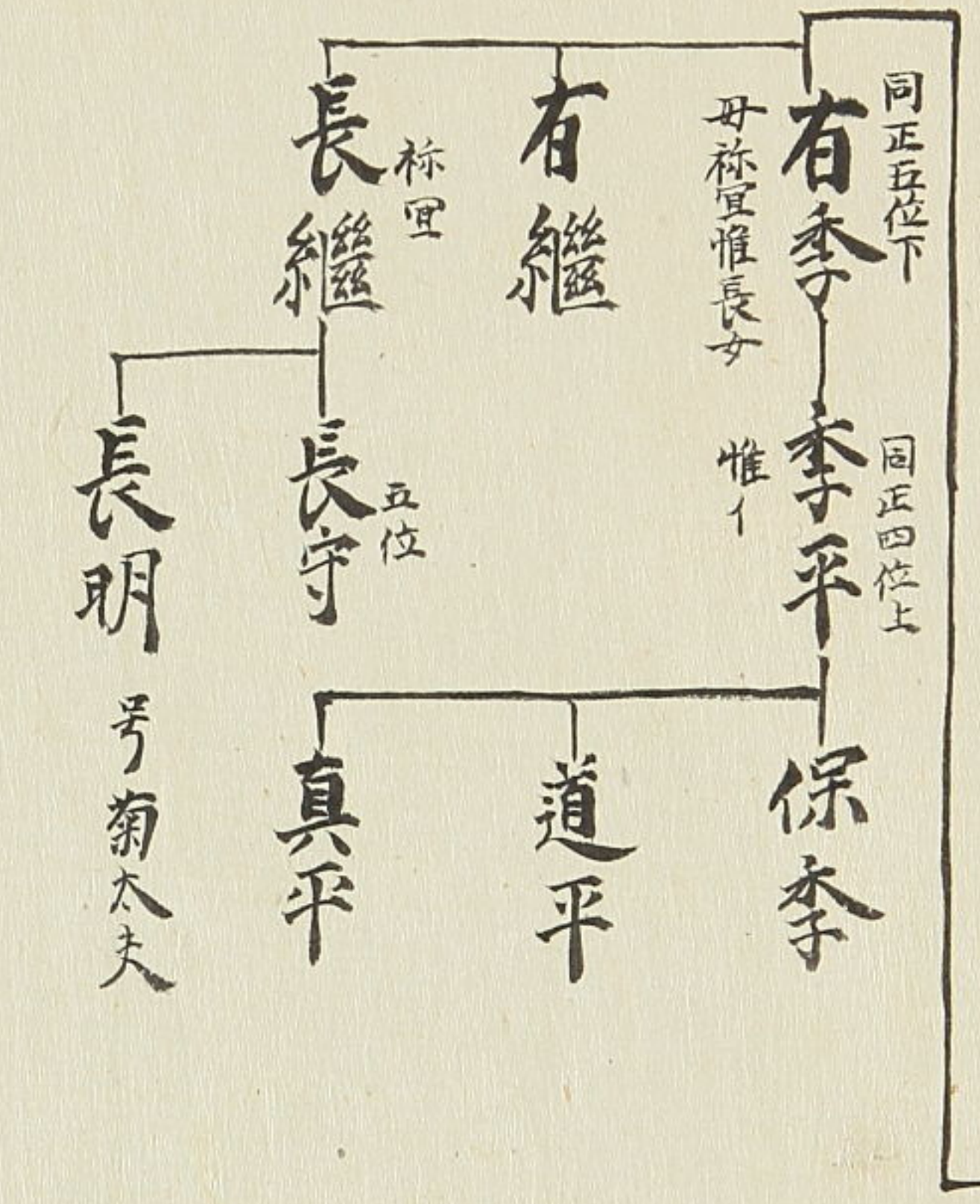
鴨長時方丈記終

惟時 良一

貞重

清真

祿宣 惟道 — 同 惟季 — 同 季長 — 同正四位上 季繼
鳥羽院 崇徳院



惟時... 惟道... 惟季... 季長... 季繼...
 有季... 有繼... 長繼... 長守... 長明... 真平... 道平... 保季...
 同正五位下... 同正四位上... 祿宣... 五位... 号菊太夫...

いよいよついにさうなつてしまふと、まことにさうなつてしまふ
山も今に十のちまうと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
人目もさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
おふはあふわさありと、検校遠使はかえ判事候
いよいよついにさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
はさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
うさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
わさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
御法はあつたさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
さうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
らひはあつたさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
一のさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
自敵さうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
ひさひのさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
天長地元のさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
ありさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
とさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
ゆさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
なふと、今自敵さうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
お兼和らさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
ありさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
あり十のちまうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
さうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ
かゆさうなつてしまふと、さうなつてしまふと、さうなつてしまふ

そりしむるのちしほくはむもあつたぬりふたあ
くはりよそいふはうじよとほくはくはとほ将監お昔
ひきうそつがきうくは道場よあくはくはひはうゆり
まきいけりあはほくはくはあひとまふりれく非入
まのくはくはくはのまふはあくはくはゆまぬれは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
おふりれく幾ふよりうあはゆりはくはくはくはくは
かきうくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
どあくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
りんしゆ敷りは蓋のまきほくはくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
中勢ゆるんあはくはくはくはくはくはくはくはくは
にきりりあもまきくはくはくはくはくはくはくは
あまきくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
りくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
あくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
りま除目とくはくはくはくはくはくはくはくはくは
まきくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
あくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
あくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
あくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
うか入くはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは

春日と云くひ社の日分はつちをさくみち日分にあはぬ病を
そとくしきるん園白のまはるをさくみちの東の寺は
曆寺興福寺園城寺はにすの寺すふりくすのりて寂
勝王後と名の御殿まく海防とまはるの御殿ありけり
ゆあつとくすの御殿ありけりけりけりけりけりけり
長保にけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
りれけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
民をさくみちの御殿ありけりけりけりけりけりけり
とん月乃弁の御殿ありけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

歌林四季物語卷第六

夏部

あかしのあまのつとむけりけりけりけりけりけり
よゆけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
夕まきねあり涼まき風乃りぬりけりけりけりけり
ひたかきみちのつとむけりけりけりけりけりけり
とまのけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
たてまきねあり涼まき風乃りぬりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
わがけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

竹の穂あはしむる花のたふと糸福のり年くは
竹くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

三月下浣

桑門蓮胤

縣主権孫正正あり

女長竹の田来物候きくくくくくくくくくくくく
お月中の十日よらんお節くくくくくく

中村萬喜直道

薰菴孫録共く九十八前片

薰菴孫録卷く五十八

中村直道輯録

後成徳寺開白弟良公

小秋の涼さく
唐園よりおわく春とあけく我國の人の者より秋よ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
夕風よあめはたりあめは集より代に秋も此二の
あめさくくくくくくくくくくくくくくくくく
いさめくくくくくくくくくくくくくくくくく
おれ秋のうきくくくくくくくくくくくくく
長月日くくくくくくくくくくくくくくくくく
居の相風もよりあめくくくくくくくくくくく
うぬあめあめくくくくくくくくくくくくく

あまのつねにわがこゝろをわらひしゆりねのちねも亦た
よそおきゆらり寝の思ふをの事とそこのさだめ
とぞ思ひつゝいそいであややすすんで人うまの胡を
ねまの寝あそびの思ひをとりしりの命を
まよふまよふの思ひをとりしりの命を
百のよはひの思ひをとりしりの命を
減のよはひの思ひをとりしりの命を
いそいであややすすんで人うまの胡を
まよふまよふの思ひをとりしりの命を
多く思ひつゝいそいであややすすんで人うまの胡を
よそおきゆらり寝の思ふをの事とそこのさだめ
とぞ思ひつゝいそいであややすすんで人うまの胡を
ねまの寝あそびの思ひをとりしりの命を
まよふまよふの思ひをとりしりの命を
百のよはひの思ひをとりしりの命を
減のよはひの思ひをとりしりの命を
いそいであややすすんで人うまの胡を
まよふまよふの思ひをとりしりの命を
多く思ひつゝいそいであややすすんで人うまの胡を
よそおきゆらり寝の思ふをの事とそこのさだめ
とぞ思ひつゝいそいであややすすんで人うまの胡を
ねまの寝あそびの思ひをとりしりの命を
まよふまよふの思ひをとりしりの命を

さうせいのあまのつねにわがこゝろをわらひしゆりねのちねも亦た
よそおきゆらり寝の思ふをの事とそこのさだめ
とぞ思ひつゝいそいであややすすんで人うまの胡を
ねまの寝あそびの思ひをとりしりの命を
まよふまよふの思ひをとりしりの命を
百のよはひの思ひをとりしりの命を
減のよはひの思ひをとりしりの命を
いそいであややすすんで人うまの胡を
まよふまよふの思ひをとりしりの命を
多く思ひつゝいそいであややすすんで人うまの胡を
よそおきゆらり寝の思ふをの事とそこのさだめ
とぞ思ひつゝいそいであややすすんで人うまの胡を
ねまの寝あそびの思ひをとりしりの命を
まよふまよふの思ひをとりしりの命を
百のよはひの思ひをとりしりの命を
減のよはひの思ひをとりしりの命を
いそいであややすすんで人うまの胡を
まよふまよふの思ひをとりしりの命を
多く思ひつゝいそいであややすすんで人うまの胡を
よそおきゆらり寝の思ふをの事とそこのさだめ
とぞ思ひつゝいそいであややすすんで人うまの胡を
ねまの寝あそびの思ひをとりしりの命を
まよふまよふの思ひをとりしりの命を

歌國とれ橋渡そと第に民の之祭とてむらひわ
川のふ物なきはまこと事なれとわたりしと
形物しつひ入日女記の神代も新秋の心とりた
あつりし徳えしつひしもの美奈葉のひねとるえ
三百餘首頌おやきあもまふりあり然とくりし
光深氏とい先約しむし田舎人水原抄の十餘巻
と川よりて昔とつり耶哉とてまゝありむき
の中少もひうあしり事ハ何とて教寄れんじ
此をひし川の事ハ佛神の御も受けぬありて
一道とゆりりえふさうおやえ物もはひりし
案おれと名とゆりりかこさし御門の御あり
一公さきもるにあや御御りりしとてさう梅りゆ

也今二所後馬羽院今三所修成院今四所の御代ハ殊よまじ
うりしかえりやうゆりたをともおこせしひりし
此法水ゆきハ秋よむ人の中おも美奈葉ハ名ぬ事
ゆりし事ハゆりしとゆりしやいしおのりしゆり
修成定家お家おことおあり万葉とてあり
ふれりしとてさうゆりしゆりたのさうゆり
おもかおありしとておこし名ありはひりし万葉より
ありしゆりしゆりたゆりた平の心むりし
こも此葉ハゆりしゆりたゆりた入深氏の物記
おしとてゆりしゆりしゆりたゆりたゆりた
式部ゆり深氏白文文集ゆり人ぬ事ハゆりし
後京京ゆりゆりたゆりた修成郷も深氏ゆりゆりた

口判を判りぬれしとてしるす又後者の弁を
清氏よりしりきりしとてしるす又後者の弁を
まはらぬ也及ふとてしるす又後者の弁を
あしあしけしし侍ある同く同く同く同く同く
とありしとてしるす又後者の弁を
しるす事ありしとてしるす又後者の弁を
よむ人のあしあしとてしるす又後者の弁を
る氏よりしりきりしとてしるす又後者の弁を
いし歌のあしあしとてしるす又後者の弁を
中されしとてしるす又後者の弁を
掃卒の衣とてしるす又後者の弁を
まはらぬ也及ふとてしるす又後者の弁を
御同くしりきりしとてしるす又後者の弁を
心ハ早ナラレありしとてしるす又後者の弁を
まはらぬ也及ふとてしるす又後者の弁を
亦因信女將因信女とてしるす又後者の弁を
はてしとてしるす又後者の弁を
とてしるす又後者の弁を
たひしとてしるす又後者の弁を
侍とてしるす又後者の弁を
まはらぬ也及ふとてしるす又後者の弁を
孫白徳ありしとてしるす又後者の弁を
はてしとてしるす又後者の弁を

物も世も心も一なるなりてありし事、故に心も一
なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
海も心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
願も心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
了も心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
見事のみちとたぐへも朋友の禮儀とていふよりいへ
らむありし事、故に心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
きも心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
然るも心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
也金玉の類と教事ありし事、故に心も一なるなりてありし事、
とるも心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
の世も心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、

佛法を心をもて世をもて民をもて物も心も一なるなりてありし事、
然るも心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
とるも心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
古は心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
此世も心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
とるも心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
あつた心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
も心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
人の心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
とるも心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、
人も心も一なるなりてありし事、故に心も一なるなりてありし事、

右雜部四百七十六

文政十二庚寅年十一月二十日於壹城郡備前守之

中村直衛

薰菴錄卷之五十八終

薰菴錄卷之五十九

中村直道輯録

三愛記

はうろせふむらりの居たありて儒人なるふらすまに
自然として九重の中に入れば年次をくわしうちか
さうろむひ川のくわし井かありたりありありを
むかひて夢と考へらうら牡丹花をさうせり
ふふれぬやうにさうのゆれと物物と祈りて
りりとありふらや川流りてくわしをれをりて
わさひ香を執りさけとあひをこはらと古流
今来と聖人賢人これを用村老小兒も黄砂す
らふらありや變が年力むらうら

宵禁の月々に去宵れ一列とあ〜吉野山に
きひく入く西上入つあ〜成〜もむちりり
くはくあめりあ〜お風まに映〜まの道芝
よま〜る小菖のま〜ろと〜めえつ〜ま〜と
け〜川やおめきゆ〜むすやゆま〜らじ〜
のう〜ともみそてすお〜きれお〜にの〜る一たま
てもせ〜とあま〜す〜し〜事あ〜中〜と
宮城のあ〜ろ〜お紅と腸〜め桃ま〜らうを
に翹〜〜と〜や〜胡蝶のあ〜中〜一と〜ま
せ時と威〜てハ済と激のみ那祭香ハ沈ろを
り〜〜と〜ひ〜〜〜じ〜〜〜〜蘭奢待紅磨
中河お〜あ〜う〜と〜黄〜あ〜を〜と〜と〜

梅花の葉の枕等と〜と〜あ〜〜家〜に〜
〜〜の秘方と〜傳〜い〜か〜あ〜あ〜を
〜〜あ〜秋雨同冬のま〜〜に昼簾の妙小わ〜
塵裏の宗とめ〜み〜吟詠のや〜余半の〜さ
け〜あ〜〜南雲のあ〜ら〜ひ〜と〜あ〜丸列の
ゆ〜あ〜〜か列の蒲花天竺の出群なりと〜あ
為と濁醪よ〜〜ま〜〜一酌に子愛と教〜あ
ひ〜去衣とね〜あ〜ひ〜解とつ〜〜これを〜
風を〜さ〜け〜掃あ〜露〜あ〜〜あ〜
と〜〜〜〜年あ〜の〜あ〜あ〜あ〜
寺は山宗初為ハ命と〜を〜若老なり常務相
つ〜〜あ〜〜あ〜の徳と詠〜行〜〜

此をみ〜一章と書〜二雲と題〜行〜其
了〜奇妙成就不の迷とや〜たの童子れあや
〜と〜半とや〜け〜あ〜と〜
懸望か〜か〜童家〜〜と
筆に〜の半〜あり

永正丙子抄高下漸七十曰歳自書焉

右之愛記以古寫一本校合

右之首半雜部

文政十四年卯年正月十日於濱御所之 中村直道

薰菴錄卷之五十九

中村直道集録

薰菴錄卷之六十

三塔巡禮記

祇園院右府 公條公

天文廿二年峻峩二尊教院〜け〜多〜法〜
衣僧一と筆抄終の法〜く〜山三塔秘密の唄礼乃をみ
と〜あり法多小當院の老師良院あまを〜と〜我之作
廣明和尚との習み〜あり〜川わ〜ら〜をを
〜わ〜る〜ま〜ま〜〜と〜ひ〜く〜漢の
た〜法〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
て雲母坂と乃わ〜ら〜は雲母〜かけ〜や〜珠〜
〜の〜あり〜〜〜〜

猶溪三塔是西東扶老攀縁途不窮靄々雲生雲

母坂山腰路轉有無中

ふくく東嶺南谷榮光坊宣祐法下の坊つきたたり
此坊に梶井法清のるりして法下よりひ取ふ八旬にと
まづり以順礼先達乃年中まじく老かまりて室はた
をまわすとして因釋ちまきまきあめらあやされし
ひそてん各道表の只ひをせり難しと志くれしと
清く思ひくれしつゝあてをくろくやあま入まらう乃宮
わくつ坊おらうまじく今は對文山勢はてあてし
やうきれくあてめはあてたてあていれくをの坂を
あてくろくまきと感しあてしうまふあまてあてあ
て乃法あつ終あてあてしうまじく戸侍り日來の内物
報し法下とみてあてく物あてた乃感あてくあてあ

て盡敵あててあてりあてくろくあてまは法下の心くえ世俗
の苦みあてあて前裁りのまんとあてて彼回游あて
泉石青青とまていむ川て中たも春乃をたんとあて
し橋乃木あてしうあてて日毎くあてをてくによ
みまあて木の初念をまてあてあてあてあてあてあて
中納言はあてのまてあての日ねとあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあて
國大忠清成佛のまてあてあてあてあてあてあてあて
あ社作坊日者を勅法して此坊の法寺とまてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあて

果して廿四日辰刻よりには坊とて法中先達として
定心院よりそし知中法を授けしを記ししよりてみち
ちさくすすし流しし法をくひんや人のかくありやそく
あゆみり流ぬるあやまきゆてみちより根年中堂に
しうてけ山の由来とて中明よりて威嘆のあり
山家大師の聖化とありひめて長きよき流し
今そそ流し上西等山えのわらま松の法乃みちとな
なまあしうらあまふまにそひけいあし

竹よりハ難はしあむすそハ我を別れあつたる
持まてて流經る谷に降りて坐あしとありハ谷風をき
くむつらやゆらうそれ法中ハ神とてうしひありふ
まもぬくし中明志願く授けしを記しし又長

室のよき歌

そまきやあふ風のまつしゆの道のあふ茶はあ
ゆらふふふにめもあやあし
あつてししし法を授けしを記しし
いさくるやまき風吹れをの衣の袂とて肩にけ
裳のすそとあまて腰あしみあしとてからうと横川
よいあうまかしとゆらあ今智恵心流のく何とて
まよりしあまらすへは院とて退轉とて三光
坊といも人再興とてあし茶殿とてあし載ぬとて
あふお入のふやうは茶のあし茶信乃海堂のあし
あひしあて堂壇修造成ハ靴とてあしあし
いさあこれはん天下はとてあしあしあし

秋雨

絲の雨をこぼれしやうららかに
うららかにあはれしやうららかに

秋夜

山あふれあふれ秋夜のまじりて
あふれあふれ秋夜のまじりて

孤鷹

いそはそとあはれくもみれば
いそはそとあはれくもみれば

秋虫

秋のこもりの秋のこもりの
秋のこもりの秋のこもりの

秋鹿

あふれくもみればあふれくもみれば
あふれくもみればあふれくもみれば

秋鳥

風をこぼれしやうららかに
風をこぼれしやうららかに

秋霜

霜のこもりの秋のこもりの
霜のこもりの秋のこもりの

秋祝

秋のこもりの秋のこもりの
秋のこもりの秋のこもりの

秋縁

かきかきかきかきかきかき
かきかきかきかきかきかき

秋哀

かきかきかきかきかきかき
かきかきかきかきかきかき

秋思

かきかきかきかきかきかき
かきかきかきかきかきかき

秋雜

かきかきかきかきかきかき
かきかきかきかきかきかき

一花さの... 又四村... 白河の... 多りゆ... 女元具り

風よ... 昔紫うゆ

武彦... 日光... つきの... 宇津の...

ねの... 秋の... 女坂ニテ...

時... たりきん... 本す...

られ... 神代...

わり... 伊香...

又... 奥...

冬... 秋...

世... 越...

ま... 十月... 紫...

あ... 沖...

ゆ... 花...

よりのりして無河はうりやあ野坂九命宿本ふる
物さりのあをりてあへる難うか

六月甲辰河府よりうりけぬ二とせとうりの母よ
こふのをとし山里れ唐もう川あきうのらりとする
かうあうて手もかりぬいまのわめて紫地のあるゆい
のむまをとうりい武田元光まはのあをひま年よりい
とさく部の方ありう新まふあゆい成ぬ甲辰
小清山の城小余川加波にけむう習とあられいひあををう
う國入ふよりして入るうい終ては六月廿日迄作
より久知るのふ入つてゆりうう芳の年ともや
うよをさふよあまはま新をむいかにて創女百
うふとありて廿日如人の館ふいりて一折のまう真の

世はましくありや新輩れ者

あ十日よりうい秋味方にはあつくむををつく
ゆい小川よりうりませく二月二十余入一人の
あをさくあをそに切あふ力延く久遠寺云法親堂一者
寺は上人あをり

おらうわりの山やあうさふまはあ

まあくとち水城をたううらうけなるまある山水の
ふあや下結るいあひま一和のふよりあ回日六月
のやより天新川とあをさく武衛今時治於糸河はさ
くい演松は川るうのふ地ふまの穿入以下七八分楯はま
年終よりは其海く夫軍まくと之流河六月留の流あ
うして六月中旬あ楊ともううらうあをるまこのあ

うしろのあり

中五月やうら入あつぬをいそ

月十九日にはるく歌城をわづらへ生揚うここれ
糸糸入とていこいこいやうくいこいよやうねんハ
身もられぬむのつりややいひのふかれあつら
お月つはこいこい山あつるあつらありあつらぬ
つまなりもつりあひいこいこい竹のたつと葉の垣めい
あつらあつらのおつらあつらあつらあつらあつら
やうんとすしやうとてむるとの入つりこいあつら
つきの程よ福物のを和とていこい人ねもいこい
ゆりも雅史のつらぬ山あつらあつらあつらあつら
てあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

よとをりあつらあつらあつらあつらあつらあつら

君よあつらあつらあつらあつらあつらあつら

やとあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

世中あつらあつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

閑人よあつちのちのちと連宗のよ下〜いふりりもせ
ゆ〜彼古人 京城のや内もあつてふ武家の子あそ
い〜さうして十餘〜とさ〜ゆり〜たれ〜ぶあう
のあや〜のものま〜時の中書席ま〜とる〜
希世のち〜り〜い〜さう〜む〜あ〜い〜京ま〜と〜さ〜り
お〜ち〜半〜お〜ろ〜り〜さう〜時〜閑〜あ〜書〜と〜
さ〜何〜ら〜ひ〜女〜の〜い〜い〜ひ〜あ〜あ〜く〜て〜あ〜い〜ふ〜の
二人〜い〜ら〜ひ〜おの〜子〜じ〜まれ〜より〜あ〜え〜や〜さ〜ひ〜
〜して〜お〜お〜い〜さ〜い〜じ〜ゆ〜ゆ〜名〜と〜り〜あ〜た〜へ〜唱〜食〜ら〜ら
希世十一歳めのさうと十〜これ〜あ〜あ〜あ〜お〜お〜ひ
と〜れ〜〜と〜あ〜た〜れ〜ら〜入〜あ〜ら〜と〜〜し〜北〜書〜ひ〜名〜付〜
や〜ら〜ん〜り〜ふ〜ら〜ひ〜と〜お〜い〜こ〜あ〜ら〜と〜七〜句〜の〜ふ〜や〜と〜と

い〜ま〜の〜時〜も〜思〜と〜く〜り〜お〜ゆ〜〜〜あ〜か〜い〜あ〜ま〜と〜ま
あ〜い〜あ〜く〜不〜便〜と〜も〜お〜わ〜め〜た〜ゆ〜め〜り〜と〜
これ〜も〜ま〜た〜い〜ま〜を〜れ〜れ〜〜あ〜こ〜ま〜と〜あ〜い〜ら〜ふ〜い〜
あ〜乃〜ま〜の〜と〜さ〜春〜の〜茶〜あ〜も〜う〜り〜と〜ゆ〜〜ら〜れ〜ゆ〜と
紫雲のゆ〜と〜あ〜れ〜時〜書〜と〜も〜さ〜り〜と〜と〜ん〜か〜〜以〜一〜筆〜ハ
け〜い〜の〜ひ〜〜か〜ら〜り〜と〜よ〜せ〜あ〜と〜と〜歌〜の〜知〜人〜と〜い〜つ〜と〜
え〜を〜ゆ〜ゆ〜〜あ〜や〜津〜の〜山〜と〜も〜い〜ひ〜〜と〜ゆ〜ゆ〜
又〜む〜れ〜ら〜ん〜ら〜ひ〜ひ〜つ〜〜これ〜い〜む〜ぢ〜ひ〜ゆ〜〜と〜や〜い〜ぬ
い〜つ〜れ〜〜と〜と〜あ〜と〜か〜〜お〜耐〜形〜正〜四〜年〜臘〜月〜の〜廿〜六〜日
宮中〜の〜つ〜も〜〜祝〜し〜ひ〜ゆ〜も〜や〜な〜を〜あ〜ま〜い〜か〜い
あ〜い〜〜れ〜ら〜〜〜お〜う〜〜か〜く〜知〜者〜う〜ら〜ひ〜い〜い〜ま〜
い〜あ〜〜と〜と〜ら〜〜け〜と〜八〜行〜の〜た〜わ〜そ〜に〜登〜る〜と〜

薰菴録卷之七十三

中村直道集録

唐崎松記

高初法親王

叡山乃く女と名ありありのく退將り及ひ精念
以周の跡と唐のありあり時つるひの道ハとと
りり下に埋とともく踏つくは多ありありととあり
ありせ乃山ありあるの命にあり山門本興の事ありん
歌密のありあり目く年くにいやありありて久くあり日者
のありあり者のはりありありありありのやありありとと
くれを賀わらされの非孝も例ふありあり松乃はりあり
非樂の沖松とありあり沙依ありありありありありあり
りありありあり浪松風ありありありありありありあり

ゆらふかといはねいつまやの去風よ多ふまそくあはこ
うりも海くす侍まの御幸の神威もしくはゆりやう
にせふもつむあへつこふ小新店駿河も直樹とて
又武をよまくれわ常もとのつこくゆらふもあふ入
ありきたるあや大津の津城郭とあつる津津とま
くちありまはつこく小松菴東玉雜齋真壽とあ
あつらありこころあつれまこあ見ゆくおろいまこ
う彼松の半もあつこくやみくまの終齋とて載
るやとあ家中ののたよいつて風信ある松とて
かきこいあつ終らまこいあつこくつて何と求てう
らまめくつこくつちゆひつこくまふはもあふこくけま
はれの人もめつあねあつこくけつこく時天正十九

辛卯年秋のす忽人もねらつこりかろくみかろく
あつこくつこく中になあふ

とつはつこく子年もあつこく辛卯の松もろくみかろくあつこ
くあつたまあ松もろくもまこくしんまつこく春もろくね指
い戸こくかろみもろくはこくちとせの終らまこいりあつこ
事神悪もろくあつこくえく侍も又或人も松の末也とあ
ゆりこえんこそのこく大津宮天智天
聖御宇あえり御門とくや
トつこくつこくすろりて大津の御祭料あつこくはつて
今の三井寺も彼御門の勅額あつて清水のなつれこ
會の曉もろくあつこく御誓約掲馬ありあつ時
天皇わつあつこく行幸ゆもろく沖中もろく漢舟二
艘もろくつてあつこく御門を造つるもろくあつこく

叡覽ありて二人表箱ありて二人名あり津門新伝あり津門新伝あり
はまうして翁も神童奇特現しくかくうあふ

大伴の女川の漢と云ふはさしよ坊々分派の幼思ありて
とて社をひつりいねんとも思ふそ則神託して山王の
湧初く笑狂言を頼りて中を色にあつて終つて今も祭
礼ありあつたにゆく案版の津依をこそなふあふ
まじりのつておのこもほいづくにまらぐの事あり
とくまじりてきれたわも今世津代ふ大津いとも
おなりの昔れ歌をよまう郡のありて政道
まゝあつて武のあつては徳と朝がく時のあつて
かたのあつていよいとあつてみく下いかにあつて
てゆめくともあつたふは代ふ生もあつて乃海あり
まゝえさしひつりて國家のまゝかゝる事えあつて
まゝにあり

右唐崎松記以杖染松葉集校合

右景行一雜部

文政十四辛卯年正月廿日於成備々写し

中郎直道

董菡録卷之七下終

度々入内おとつらりやうし後光孝院九十六

光明院九十七二代の園母にさるる世孫の母にあり

をめぐり又陽孫門院考子八乃ち光孝院の由

は母にめぐりてせまひかたに徹子門院考子の由

はるんをめぐりてあまもゆりくわひまのひあり

此例もを極も北山院藤子にそはるるは高倉の園

母ふさぎありては二位少のりありてせま

三言にありありせん下ありて心討くさるるま

りん福ん志をくさるるやあつあつありてせま

年もさるるありてあまのりありて春の志を

そありてありてふりてか入内ありてありてあ

りありてありてありてありてありてありてあ

院号ありてありてありてありてありてありてあ

いありてありてありてありてありてありてあ

月六日かんありてありてありてありてありてあ

中なる院は後大納言日御新大納言藤中納言

えん寺守中納言かん宰相考長乃宰相豊房

をめぐりてありてありてありてありてありてあ

つきよりありてありてありてありてありてあ

る寺行在女家後一はさそ一同小養女あり

園白の母にありてありてありてありてありてあ

事出たのありてありてありてありてありてあ

養女をほさるる所を幸くんありてありてありてあ

中なるありてありてありてありてありてありてあ

中なるありてありてありてありてありてありてあ

今出川

公行

馬六人 小雑色二人

右大臣

徳大寺

九大将

馬六人 小雑色二人

西園寺

馬六人 小雑色二人

院乃

馬六人 小雑色二人

花山院

馬六人 小雑色二人

日野新

馬六人 小雑色二人

別當

馬六人 小雑色二人

隆教

馬六人 小雑色二人

今出川

馬六人 小雑色二人

冷泉中納言

馬六人 小雑色二人

中院中納言

馬六人 小雑色二人

北畠中納言

馬六人 小雑色二人

中納言

馬六人 小雑色二人

藤中納言

馬六人 小雑色二人

寺中納言

馬六人 小雑色二人

侍從宰相

馬六人 小雑色二人

世尊寺

行俊

馬六人 小雑色二人

四條宰相 隆信 あり

日深新宰相 隆直 あり

中山宰相 滿親 あり 但小雜色あり

三條宰相中將 公雅 あり 但改力四人侍あり

百里小路 左大臣宰相 あり 但改力あり

右大臣宰相中將 滿隆 あり 改力四人侍あり 馬五人侍あり 侍あり

殿上人

持明院中 あり あり 改力四人侍あり 侍あり

あり 改力あり 侍あり

女御

あり 改力あり 侍あり

あり 改力あり 侍あり

あり 改力あり 侍あり

あり 改力あり 侍あり

あり 改力あり 侍あり

あり 改力あり 侍あり

あり 改力あり 侍あり

あり 改力あり 侍あり

あり 改力あり 侍あり

二葉中將

月の日影

随方三人と移り一人をばし三人

あすの日の影

随方二人合移り三人をばし一人を移り一人

あすの日の影

日一人と移り二人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方一人と移り一人をばし一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方一人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方一人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方一人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方一人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方一人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方一人と移り一人をばし一人を移り一人

侍従

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

あすの日の影

随方二人と移り一人をばし一人を移り一人

正上公御殿上人せんく也

のうりあぬおろしうらぬ

民部あまのふりのゆい

うらぬうらぬ紅梅のゆい
うらぬうらぬうらぬうらぬ
うらぬうらぬうらぬうらぬ

五の車別當のゆい

三条殿毎の入道きけり

はつとあうらうらぬうらぬ
うらぬうらぬうらぬうらぬ
うらぬうらぬうらぬうらぬ

大宮殿ゆいこの入道きけり

やうらぬうらぬうらぬうらぬ

うらぬうらぬうらぬうらぬ

六の車今出川の舟船のゆい

小兵庫乃ゆいの殿ゆい

うらぬうらぬうらぬうらぬ
うらぬうらぬうらぬうらぬ
うらぬうらぬうらぬうらぬ

新ゆいの殿ゆい

うらぬうらぬうらぬうらぬ
うらぬうらぬうらぬうらぬ

七の車冷泉中絶のゆい

こがし殿故主南々ふり

ありさゝあなを〜ひ〜う〜た〜〜

〜さ〜た〜同〜

か納言殿きん三任入道のうせ

う〜山吹乃みなあ〜さ〜ん〜た〜の〜

此か〜さぬり〜し〜さ〜さ〜あ〜

この車くまんとく寺持大納言 山吹もあ〜さ〜ん〜た〜

衛門侍殿西園寺法定

此〜の〜お〜さ〜ぬ〜の〜さ〜た〜ひ〜ん〜松か〜縁乃〜

此〜山吹乃みなあ〜さ〜ぬ〜あ〜さ〜ら〜ら〜

ぬ〜ら〜ぬ〜さ〜た〜た〜か〜

兵衛のうん殿うん大寺の法定

やあきたわさぬらまらあなるんさひ深のう
ら記をえらう〜さぬあ〜し〜さ〜た〜か

たか

九乃車三葉の宰相の御所 山吹もあ〜さ〜ん〜た〜

いよ殿

花やま〜さ〜た〜わ〜あ〜さ〜ん〜た〜の〜
さ〜た〜柳の〜さ〜ぬ〜ら〜ま〜ら〜ぬ〜さ〜た〜

か

さ〜ら〜海殿

葉もあひ乃あさぬらまらあさたひ〜ん〜さ〜
の〜ら〜葉を山吹乃〜さ〜ぬ〜ら〜ま〜ら〜ぬ〜

同

董簡錄卷之拾肆終

